



Title	英語史研究の意義と方法をめぐって : 小論
Author(s)	田尻, 雅士
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2003, 27, p. 53-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99268
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究ノート

英語史研究の意義と方法をめぐって－小論

田 尻 雅 士

本稿は、主として、英語史を一通り学び終え、これから本格的に初期英語および英語史研究に従事しようとする人々を念頭に書かれたものである。しかしもちろん、英語史の上級入門編といったようなものではなく、筆者なりのささやかな問題提起とお考えいただきたい。なお、参考文献は稿末にまとめず、その都度文中に明示したことをお断りしておく。

1. なぜ英語史を学ぶのか

日本の英語学の草分けとも言えるべき学者である市河三喜は、その著書『古代中世英語初歩』第2版（東京：研究社、1955年）の「はしがき」の中で、次のように述べている：「わたくしは日本人としてはどこまでも現代英語の研究に重きを置くべきであり、古代及び中世英語の研究は労多くして効少ないものであると信ずる者であるが、しかし学問的立場においては古い時代の英語の正確な基礎的研究は必要なものであるから、出来るだけ一般の英語研究者にも参考になるように書いたつもりである」。一方、この本を『古英語・中英語初歩』（東京：研究社）と改題して1986年に改訂出版した市河の弟子・松浪有は、やはり「はしがき」の中で、「今回の改訂に当たっても、OE・MEを学ぶのは現代英語をよりよく理解するためであるという市河先生のモットーが基本となっていることはいうまでもないが、時代の変化とともに、わが国でも中世の英語・英文学もかなり盛んになって来た事情も無視できないと考

えた」と、学界の動向の変化を述べている。

ここである古英語 (OE) とはだいたい西暦 700 年頃から 1100 年頃までの、中英語 (ME) とは 1100 年頃から 1500 年頃までの英語を指し、以降今日に至るまでの英語を近代英語 (Mod E) - 現代英語も近代英語の一部と言えるが、20 世紀以降の英語を特に独立させてそう称する場合もある - と呼ぶのであるが、松浪の言葉の中の OE・ME を、そのまま「英語史」に置き換えてもほぼ妥当であろう。英語史を学ぶのはあくまでも現代の英語をよりよく理解するためであるという考え方は、市河のみならず、今日でも多くの人が口にする。と同時に、日本英語学会や近代英語協会、日本中世英語英文学会、英語史研究会などの設立に見られるように、英語圏の研究者と伍して、英語史や初期英語研究に従事する日本の研究者も増えてきた。単純な言い方をしてみれば、手段としての英語史研究が、次第に目的化してきたと言えるのではないだろうか。

「歴史は、現在と過去との対話である」とは、イギリスの歴史・政治学者 E. H. Carr の言葉であるが、語史の場合、それを学ぶことによって、外国語としての現代語の習得および研究にいかなるメリットがあるのだろうか。漠然と「プラスになる」と考える人は多いだろうが、どのように、と問われると、答えるのはなかなか難しい。まず第一に、英語史などほとんど知らなくても、英語の達人と呼ばれる人はいくらでもいる。より専門的な英語学研究にしても、古い英語のことを特に知らなくても、現代英語の研究はそれなりに可能であると言える。しかし、そう言い切ってしまうと身も蓋もないので、英語史の知識と現代英語との関係について、今少し考えてみよう。

口語もしくは非標準的な用法は別として、‘myself’ と言って ‘meself’ と言わず、‘himself’ と言って ‘hissel’ と言わないのはなぜだろうか。「心からの歓迎」を英語に直すとしたら、‘a hearty welcome’ とか ‘a cordial welcome’ といった訳が考えられるが、英語の母語話者はどちらにより暖かみを感じるだろうか。そしてそれはなぜだろうか。このような疑問に答えようとするならば、どうしても英語史の文献を繙かなければならない。ここではあえてその

答は用意せず、各種文献で読者自身に確認していただきたい。前者については、例えば寺澤芳雄・編集主幹『英語語源辞典』（東京：研究社、1997年）の‘self’の項を見れば、「そんなものかな」という程度でも理解が得られるであろう。また、口語や非標準的な用法に‘meself’や‘hissel’が存在する理由を考えるヒントにもなる。後者については、英語語彙史を多少学べば、かなり説得力のある答が見つかるはずである。英語の単語は、大雑把に言って、OE期から存在している本来語と、主としてME期以降に入ってきた借用語（特にラテン語、フランス語）に分けられる。日本語でいうなら、大和言葉と漢語の関係といってよい。このことを知っていれば、「心からの歓迎」も文脈に応じて訳し分けられることになる。実際、hearty/cordial と同じようなベアは英語にはいくらかでもある。

さらに卑近な例を挙げよう。2002年のサッカー・ワールドカップではイングランド代表チームの David Beckham 選手が話題を呼んだが、この Beckham という姓の語源は何なのだろうか。前出の『英語語源辞典』などによれば、‘beck’は古ノルド語（8世紀から11世紀にかけてブリテン諸島を含むヨーロッパ各地を荒し回ったスカンジナビア人、いわゆるヴァイキングの言葉）で「小川」の意味であり、‘ham’は古英語以来の語で「町」や「村」、あるいは「(囲い込まれた) 牧草地」の意味と考えられる。つまり Beckham は「小川の流れる地（出身の人）」といった意味である可能性が高い。英語史的に興味深いのは古ノルド語と古英語の語が融合している点（こういう単語を hybrid - 混成語という）であり、後期古英語・初期中英語期の言語状況を反映しているが、詳しい背景は英語史の文献にあたっていただきたい。（さらに言えば、‘beck’はドイツ語の‘Bach」と同語源であり、音楽家のバッハは「小川さん」ということになる。）これは少々蘊蓄を傾けすぎかもしれないが、ちょっとした話題提供になるし、英語史の授業では恰好の余談の種である—こういう話は学生はよく覚えている。以上のように、英語語彙の歴史的背景に対する知識は、実用面（あるいは社交面？）においてもかなり重要である。

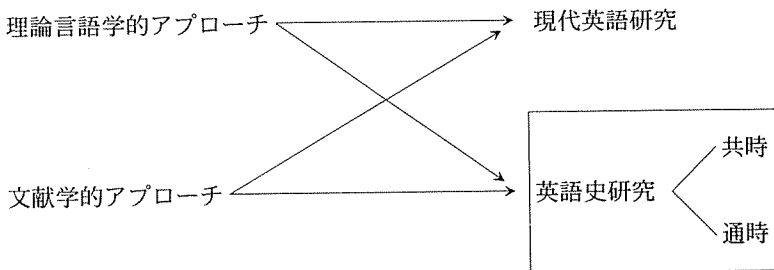
とはいえ、上記のようなことは、英語学習でもかなり上級レベルでのみ資

することであるし、それも系統立った英語史の本を読まなくとも、その都度大きな辞書を丹念に引けば済むことであるとも言える。結局、英語史の知識が現代英語の習得・研究に絶対不可欠である、と断言する勇氣は筆者にはない。ただ、英語の歴史的背景を知ることによって、その人の英語の「深み」といったものは確実に増すであろうし、現代英語を理論言語学的に研究する場合でも、一層の正確さを期することができるであろう。さらに、ここはひとつ割り切って、英語史・初期英語の研究を「研究のための研究」と考える人がもっと増えてもいいのではないか。先に述べた手段の「目的化」である。学問とは、それがいわゆる実学であっても、本質的にそのようなものであると思われる。また、古い英語を読み解いていく過程において、いにしえの人々の生の言葉、思想にふれることができるという大きな余祿もあることを付け加えておく。

英語史に限定しての議論であったが、以上述べたことは、大筋でどの語史研究にもあてはまることと思う。英語史の入門書は類書が数多くあるので、英語史そのものの概説はそれらに譲りたい。以下では、英語史研究の英語学全体の中での位置づけ、方法論、注意すべきこと、などを考えてみたい。

2. 英語史研究の位置づけと方法

英語史研究が英語学の中でどのように位置づけられ、どんなアプローチがあるか、筆者なりに図式化してみると、次のようになる。



ここで、左側は方法論を表し、右側が研究対象ということになるのだが、一言で「英語」といっても、研究対象としては、音韻・形態・統語・語彙・文体、などに下位区分できるのは言うまでもない。

まず、方法論から見ていくと、ここでいう理論言語学的、文献学的というのは、それぞれ linguistic と philological の謂である。前者には構造主義、生成文法、認知言語学など、比較的最近発展を見た言語理論が含まれる。後者の定義はなかなか難しいのであるが、例えば統語論でいえば、いわゆる伝統文法に則ったやり方で、テキストを分析していく作業などがこれにあたる。あとでも述べるコーパス言語学は、コンピュータに読み込ませた言語資料をもとに当該言語の研究をする分野であるが、これは基本的には文献学の範疇に入ると言ってよい。事実、この分野で活躍している人々は文献学系の研究者が多いのである。理論言語学と文献学の違い（優劣ではない）について、ここで論じる余裕はない。これについては、統語・文法に限った議論ではあるが、渡部昇一『秘術としての文法』（東京：大修館書店、1977年；講談社学術文庫、1988年）所収の「秘術としての文法学について」が有益な示唆を与えてくれる。矢印で示したように、それぞれのアプローチで現代英語・英語史のいずれをも研究可能であるが、現実には、今日では理論言語学と現代英語、文献学と英語史の結びつきがそれぞれ強い。もっとも、逆の結びつきも当然あるわけで、例えば時事英語を研究している人の多くは、文献学的アプローチで現代英語を分析しているといえよう。英語の新聞・雑誌（最近は特にインターネット版）から使用語彙を抜き出す作業などがそれである。一方、理論言語学的手法で英語史の研究をする場合、現代英語を扱う場合のように、母語話者から無限に存在する例文を任意に取り出してくるわけにはゆかず、限られた数の書かれた資料のみが頼りである。したがって、理論的に分析する以前に文献学的作業が不可欠となる。英語史研究における文献学者と理論言語学者の協力の必要性が、英語学界でしばしば話題になっているゆえんである。

次に、英語史研究のみに焦点をあてる。ここで共時・通時と区別したが、

共時的研究とは、英語史上において、特定の時代や個人の言語を重点的に吟味するものである。「シェークスピアの英語の研究」といったものがこれにあたる。通時的研究は、言語現象が時代の変遷とともにどのように変化していったかを探るものである。例えば、英語の比較級・最上級がOE、ME、Mod Eにおいてそれぞれどう変わっていったかを研究するのはこれにあたる。普通、「英語史概説」といった本は通時的なものなので、英語史研究を通時の研究、現代英語研究を共時的研究と呼ぶ人もいるが、筆者はこれを misleading と考える。(ただし、「シェークスピアの英語」といっても、頭の中では常に現代英語との対比が行われている訳で、その意味では共時的英語史研究も常に通時的側面を有している。)

さらに、図示はしなかったが、内的英語史・外的英語史という区別をすることがある。前者は純粋に言語現象のみを研究対象とするものであり、後者は社会の歴史との関連において、英語史を研究する。例えば、英語語彙の変遷を見る場合、イギリス史上の一大事件である1066年の「ノルマン征服」を見逃すわけにはいかない。これを境にフランス語語彙の大規模な流入を見たからである。一方、統語法などは一般に社会的変化の影響を受けにくいとされるので、内的英語史研究となることが多い。要するに、この区別は対象とする言語現象の違いによるところが大きいといえる。

以上、英語史研究の英語学における位置づけと方法論について見てきたが、筆者自身は、かつて文献学的アプローチによる英語史研究、特に統語法・語順に携わっていた。共時の研究(後期ME)が中心だったが、時に通時に及んだこともある。現在は14・15世紀の物語詩などの、どちらかと言えば文学・文化的研究に興味を持っている。しかし、文学・文化的研究といっても、その対象が古いものである限り、英語史研究への心配りは不可欠だと思っている。また、研究対象のテキストが収められている写本(印刷術が導入される以前の手稿本)にも、覚束ないながらも関心を持っている。ヨーロッパ古来の philology の研究態度とは本来そのようなものである筈である。それはまた東洋の訓詁の学に通じるものであるかもしれない。

話を元に戻そう。英語史研究において、最近とみに顕著な傾向がある。一つはコーパス言語学などに見られるコンピュータの利用、もう一つは写本研究の重要性に対する認識である。コンピュータを利用すれば、例えば、ある文献のコンコーダンス、つまり用語索引などが比較的容易に作成できる。これは特に語彙研究では大変な威力を発揮する。また、歴史的なものも含む英語コーパスが各種開発されており、英語史研究全般に大変裨益している。さらに、英語史研究の基本的ツールともいえる *The Oxford English Dictionary* が CD-ROM 化されたのも画期的であった。一方、写本への注目は、版本（比較的新しい印刷本）を使った研究の限界への認識などがその背景にあるものと思われる。最新のテクノロジーと古文書が同じ時期に脚光を浴びているのはなんとも興味深い。最近では同一作品の複数の写本（異本）や版本をコンピュータに入力し、インターネットや CD-ROM を媒介として提供することも可能になった。いわゆるハイパーテキスト (hypertext) であるが、例えばある作品のある写本のある一行が、他のいくつかの写本や、場合によってはいくつかの版本でどのようになっているか、たちどころに画面上に呼び出せるというものである。以前ならば、写本のマイクロフィルムを世界中の図書館からかき集め、版本を買い込んで数日、数十日がかかりで行った作業が、ものの数分でできるのである—研究対象作品のハイパーテキストが現に存在している場合の話ではあるが。機械音痴の筆者は、このような状況を大きな期待と一抹の不安と警戒心が入り交じった心境で静観している。コンピュータ関係のことはその道の専門家に譲り、以下では、写本を利用した英語史研究の一例、さらに写本および写本をもとに作られた版本の特質を無視した場合に起こりうる危険性について述べてみたい。

3. チョーサー写本に学ぶ—その 1

ME 期を代表する詩人、Geoffrey Chaucer (1340?-1400) は英詩の父とも呼ばれ、その言語は多くの学者によって研究されている。日本の学界に限って言うならば、今ではシェークスピアの英語よりも扱われる頻度が高いとさえ

言える。ところが、「チョーサーの英語」とはいうものの、間違いなくチョーサーの自筆であると確認されているものは現存しない。例えば、詩人の晩年の代表作である『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)にしても、比較的、詩人の言語をよく伝えているとされる15世紀初頭の二写本を初めとして83の写本が残っているが、チョーサーの自筆ではない。そこで現代の編者たちは、この二写本などを底本として、チョーサーの英語を「再現」するのである。『カンタベリー物語』のテキストとして現在よく使用されるものに、Larry D. Benson 編 *The Riverside Chaucer* (Boston : Houghton Mifflin, 1987年)がある。一般にチョーサー研究では、はっきりそうだと断らなくとも、これを仮に「チョーサーの英語」として議論を進めるのが普通になっている。

チョーサーの韻文の言語的特徴の一つに語順の多様性が挙げられる。これは主として、詩のリズムと脚韻の必要性によるところが多く、また、時に文体的効果をねらった結果である場合もある。ただし、語順が多様であるといっても、どんな語順でも自由気儘に現れる訳ではなく、もちろん一定の傾向がある。例えば、『カンタベリー物語』の中の韻文の一部、4,444行中の主語、動詞(助動詞)の語順の分布は次のようになっている。(リバーサイド版の親本ともいえる版本を底本にした研究書、Andrew MacLeish, *The Middle English Subject-Verb Cluster*. The Hague : Mouton, 1969の統計を筆者がまとめなおした。)

	S V	V S
主節	1,762 (74.9%)	589 (25.1%)
従属節	1,512 (93.8%)	100 (6.2%)
計	3,274 (82.6%)	689 (17.4%)

この表から、SV語順が特に従属節において優勢であったことがわかる。VS語順は、主節で文頭に主語以外の要素が置かれた時に、特によく出現する。これはゲルマン語に多く見られる *verb second*、すなわち文中において動詞が二番目に来る原則に則った伝統的語順であり、OE、初期MEではその傾向がかなり強い。しかし、この原則は英語では次第に消失していったのである。

さて、15世紀の『カンタベリー物語』の写本群では、このような語順にどのような改変が加えられたのだろうか。(念を押しておく、MacLeish はチョーサーの直筆の語順を調査したわけではないが、直筆に近いと考えられる版本を用いているのは事実である。) 筆者の調査によれば、上の表のVS語順のうち、一写本あたり平均12.5例、すなわち1.8%がSVに改められている(うち、主節では10.0例; 1.7%、従属節では2.5例; 2.5%)。一方、SVをVSに改めているのは、10.4例、すなわち0.3% (うち、主節では9.9例; 0.6%、従属節では0.5例; 0%) である。(詳しくは、Masaji Tajiri, 'Variation of Word Order in the Manuscripts of the *Canterbury Tales*,' 『大阪外国語大学論集』2 (1990): pp. 39-52 を参照されたい。) 数の上ではごく僅かであるが、SVをVSに改めるよりVSをSVに改める傾向の方が強く、ことに従属節のVSがSVに書き換えられる率が最も高いことがわかる。このことは、15世紀の写本の写し手—写字生—たちがチョーサーの韻文的語順に、一種の違和感を示したことを物語っているように思われる。

語順の異同には、このほかにも、OVやCVといったOEなどではよく見られる語順をそれぞれVO、VCに改めている事例、名詞の後ろに置かれている形容詞を前置させている事例などがかなり多く見られる。もちろん、これとは逆方向の—例えばVOをOVに変えるような—改変もあるのであるが、出現する率はずっと少ない。

以上見てきた現象は、チョーサーの韻文的な、また技巧的な語順を、写字生たちが散文的に改めただけのことであって、英語の語順の発達とは特に関係ないとも言える。しかし、韻文の中にはVSやOVといった、いわば伝統的な語順がよく保たれている傾向があることも事実である。とすると、中英

語が近代英語へと移行しようとしている過渡期のこの時代の写字生たちが、チョーサーの英語に、ある種の「古めかしさ」を感じとったと考えてもよいのではないか。(付言しておく、当時の写字生は、自分が手にしている元の写本—*exemplar*—に手を加えることにはあまりためらいはなかったのである。またもちろん、無意識的な改変もあったであろう。)

さらに、語順だけでなく、いろいろな言語現象の写本中のヴァリエーションを詳しく調べることによって、ME後期の言語変化の様子をより明確にすることが可能になるであろうし、すでに幾人かの研究者によって試みられている。チョーサーの英語の研究は共時的英語史研究と考えられるけれども、その写本をも射程に入れることによって、通時的研究にも貢献できるのである。また、チョーサー作品に限らず、同一の文献にある程度時代を隔てた複数の写本があれば、この手法が可能である。

4. チョーサー写本に学ぶ—その2

前節でも述べたが、『カンタベリー物語』にはチョーサーの失われた自筆に近いとされる写本が二つある。一つはヘングワート (*Hengwrt*) 写本 (以下 Hg)、いま一つはエルズミア (*Ellesmere*) 写本 (以下 El) で、15世紀初頭におよそ十年の間隔をあけて、おそらく同一の写字生によって書かれたとされる。今日、流布している主要な版本は、ほとんどすべてこのどちらかの写本を底本としている。

Hg と El は、当然、83写本の中にあっては互いにきわめて類似した部分が多いのであるが、それでもかなりの違いがある。第一に、*Tales* を構成する各物語の配列からして異なっている。個々の箇所を読みについても、筆者の調査では「騎士の話」(*The Knight's Tale*) の第一部、496行の中に64もの異同が確認できた。しかも、これには単なる綴りの違いなどは含まれていない。したがって、「チョーサーの英語」といっても、どちらの写本を選ぶかによって得られる統計結果が異なってくることになる。(詳しくは、Masaji Tajiri, 'Hengwrtism and Ellesmerism—Notes on Some Editions of the *Canterbury Tales*.' *The*

Tabard 3 (1991): pp. 22-37を参照されたい。)

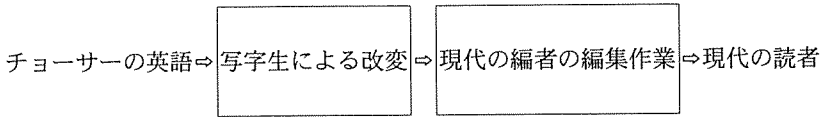
さらにやっかいなことがある。版本が Hg、EI のいずれかに依拠しているといっても、実際には、両写本に齟齬が見られる場合、それぞれの底本に常に忠実なわけではなく、時として他方の写本、もしくはまったく別の写本の読みを採っていることが多いのである。筆者が調べた代表的な九つの版本(Hg を底本とするものが三つ、EI を底本とするもの六つ)のうち、一つだけが Hg にほぼ完全に忠実で、あとは多かれ少なかれ今述べたような傾向が窺える。前節で紹介した *The Riverside Chaucer* (底本 EI) も、両写本の異同箇所では Hg の読みを採用している場合がかなり多い。

「歴史的現在」と呼ばれる現在時制は、本来過去形が期待される文脈で現在形を用いることで、文体的効果をねらったり、韻律の要求を満たしたりするものである。チョーサーの作品に多いとされる。「騎士の話」978行目は EI では次のようになっている(下線筆者、次例も): ‘And by his Baner / born is his penoun’ (彼の軍旗と並んで、槍旗も担がれています)。(斜線は virgule といって、当時の写本によく見られる行中の句読法である。)これは歴史的現在の一例であるが、Hg では ‘is’ は ‘was’ となっている。さらに版本を調べると、EI を採っているものが七つ、Hg を採っているものは二つである。つまり、Hg を底本にしているはずの版本のうち一つはここで EI の読みを受け入れているのである。

「多重否定」—否定の否定ではなく否定の強め—も ME にはよく見られる統語現象であり、しばしば研究の対象になる。「騎士の話」1122行は Hg では、‘I nam but deed / ther nys namoore to seye’ (僕は死んだも同然だ、もう何も言うことはない) となっている。‘nys’ は否定辞 ‘ne’ と ‘is’ が融合した形態である。ところが EI では、ただの ‘is’ が用いられている。版本はここではすべて Hg の読みを採用している。では、常に版本が多重否定を採っているかというところではなく、974行目にあるこれと同じパターンの異同箇所では、Hg 派、EI 派に分かれているのである。おそらく 1122行目では語頭の [n] が三つ連続する頭韻の効果をチョーサーが意図した、と編者が判断したのであろう。ち

なみに974行目では多重否定を採ったとしても、語頭の [n] は二つにしかならず、頭韻の効果は薄い。とはいえ、チョーサーが実際にどう書いたのかは結局不明である。

問題点を整理してみよう。「チョーサーの英語」として研究の対象にするけれども、極端な言い方をすれば、私達は二つのフィルターの濾過を受けた、今は無い「チョーサーの英語」を手に行っているのである――



直接写本にあたれば、フィルターのうち一つは除去できたことになるが、それとてもチョーサーの本文ではない。それに、場合によっては現代の編者の手が加えられたものの方が、かえって詩人の言語に近い場合もありうる。

以上はいわば瑣末なことであり、また嘆いてみてもどうしようもないことなのであるが、この事実だけは認識しておいたほうがよいであろう。

5. まとめ

第1、2節では英語史を学ぶ理由や方法論を、身近な例を通じて、また最近の動向を踏まえつつ述べた。第3、4節では写本研究と英語史研究の関係について、それぞれ違った角度から焦点をあてた。いささか重箱の隅をつついた感じで、これから英語史を本格的に勉強しようとする人の出端をくじいたのではないかと恐れている。英語史研究においては、大雑把な流れを捉えた上で様々な仮説を試みることも重要である。しかし一方で、共時的研究を積み重ねることによって、仮説を補強していく作業も大切であろう。その際、第3節で述べたように、写本（異本）研究が一つの手段となりうる。また、第4節では研究の際に使用する写本・版本の種類によって、得られるデータが変わってくることを述べた。現実には、皆が皆、数種類、数十種類の写本

や版本にあたることは不可能である。しかし、以上の事実を認識していれば、
思わぬところで pitfalls に転落することも防げるのではないかと思うのである。

